「主人と下僕」の論理と「自己意識」

荒　木　正　見

小論はヘーゲル (Hegel, G. W. F.) に於ける「自己意識（Selbst-bewußtsein)」の分析の一端を為すものである。

筆者は先に『精神現象学 (phànomenologie des Geistes) [1] 』における「自己意識」章の端緒的部分[2] について詳しい分析を試み[3] 、「自己意識」の基本構造を考察した。

小論が考察の対象にするのはそれに続く「A　自己意識の自立性と非自立性、主人であることと下僕であること[4] 」の節である。標題からも明らかなように、これらの節はそれぞれ「自立性」を「主人」「下僕」という具体的な状況のなかで、連続的および相関的に考察しようとする。

この場合、連続的および相関的とは、前述の拙論[5] で述べられた様に、各々の術語を契機 (Moment) として理解することを意味する。即ち、それぞれの概念は百科事典的な羅列ではなく、それぞれに有機的な連関をもって叙述されることを意味する。ところで、この『現象学』においてその有機的連関は、前に述べられた機能的構造や展開を受け継ぎながら、新たな構造や全体を構成する契機として働く概念的要素を立ち現わせて叙述を進めるという仕方で示されるのであった。このような要素と構造の機能的関係を詳しく考察するのにふさわしい方法として、小論では前述の拙論[6] と同様、コード分析の手法を前提にして考察を遂行する。しかし、極めて限られた紙数においては機械的な構造分析の記述を省略し、いくつかの焦点に絞った分析を行なわねばならない事を付記しておきたい。

さて、小論の分析の中心的テーマは言うまでもなく、「自己意識とはなにか。」ということである。『精神現象学』「自己意識」章は、「真なるもの (das Wahre) は全体 (das Ganze) である」とし、さらにその全体とは「ただ自ら展開すること (Entwicklung) によってのみ自らを完成する実在にほ

かならない。[7]」と述べられるような、絶対的な意味での全体を構成する一つの契機であるが、当然そこでは「自己意識とは何か」が論じられている。しかもそれは先に述べたように先だつ展開に次々に新たな構造や要素（概念）を立ち現わせて重層的に展開していくのである。従って、この章で自己意識の意味を読み取る為には、それら重層的な構造の全体を解析し、意味を読み取るしかない。

そこでまず叙述に従ってヘーゲル自身によって分けられた「自己意識」章の３つの部分のうち第１の部分、即ち序文に相当する端緒的部分[8]の分析から得られたコード[9]（構造や要素）を先の拙論[10]に従って整理しておく。

１．叙述上のコード（展開順）

まず、テキストの論理的流れから直接的に導かれるコードを辿れば次の通りである。[11]（括弧内は説明の為、筆者が付記）

１．⑴自らの真理と等しいという確信（自立性の自覚）
　⑵第１の区別された契機（他在の自覚）
　⑶第２の区別された契機（自己と他在との統一）
２．欲望 (Begierde)
　Ａ．生命 (Leben)
　　⑴区別項の廃棄（生命という抽象的概念）
　　⑵区別項の存在（生命ある個体の区別）
　　⑶流動態（類）の存在（諸個体を貫く同一性）
　Ｂ．自己自身
　　⑴純粋自我（未分化の統一的状態）
　　⑵欲望（他者への関係）
　　⑶自己意識の二重化（自己と他者との分裂）
　　||
３．自己意識の二重化

この展開の流れを見れば、まず１→２Ｂへと繋がる自己意識の形式的な（もしくは原初的な弁証法による）発展が指摘され、次にその形式に挟まれる様に現われる２Ａの「生命」という新たなコードが指摘される。勿論、全体の流れこそがヘーゲルの意図する、意識に立ち現われる順序そのものであることはいうまでもない。このヘーゲルの意図を明確にする為に先の拙論では[12]次の様な背景的コードを推測した。

（背景的コード）

まず指摘されるのが全体を常に展開させていく「力動」である。それはすぐさま、1，2A，2Bのそれぞれに(1)(2)(3)で示される、「統一→分裂→統一」という「止揚」でもある。また、この「統一」が哲学史的には例えば「イデア的世界」の探求等に現われる最も高い意味での平衡、即ち「ホメオスタシス」であることも付記しておかねばならない。更に、この「力動」や「止揚」はヘーゲル的意味での「経験」である。端的に言えば『精神現象学』の展開の全ては意識が経験することの展開にほかならない。従ってその「経験」は意識自身でありながら未だ自覚されていなかった潜在性の「現実化」であるとも言えよう。

端緒的部分では以上の様なコードを指摘することができた。

ここで次の展開との連続から言えば1(3)，2A(3)のいずれもが統一態を形成しているにも拘らず2B(3)もしくは3が分裂しているという特徴を指摘することができる。即ち、自己意識の基底的なこの段階に於いては、自己意識は統一態としての「生命」を持つのであるが、それが「欲望」をもまた持つことで、本来一つであるべき自己意識自身が分裂してしまっているのである。当面この分裂を統一させることが自己意識の課題である。

1．「主人と下僕」の展開

まず、テキストの流れに沿って展開を明確にする。

Ⅰ．自己意識の二重化

前の展開を受け継いで自己意識は二重に分裂している。即ち「自己意識に対して他の自己意識が存在して[13]」いる。但し、これは本来「生命」もしくは「類」という統一的さらにはただひとつの意識に起こったことであり、この分裂はすぐさま統一へと向かわなければならない。その為には「欲望」による関係、つまり、自立性を得る為に一つの自己意識の他の自己意識に対する一方的な関係を撤廃しなければならない。

Ⅱ．「承認（Anerkennen）」の純粋概念

自己意識という一つの意識において起こった分裂は現実の二つの意識の形態として考察されるが、この場合はまだその二つの意識は名前を持たない。叙述する者としての反省的意識[14]は前の展開から導かれる論理的な統一概念に向けて二つの意識の新たな関係を推論する。

それはまず「自己意識の他者に於ける存在を廃棄することによって他者を再び自由にさせる[15]」ことに向けられる。つまり、欲望に特有の、他者に対する一方的支配の意志を廃棄しいわば他者の意志をも尊重することへと向かうのである。そもそも自己意識相互の行為というものは「他者に向かっているのと全く同様に自分に向かっているという限りにおいてのみ二重の意味を持つのではなく、全く不可分に一人の行為が他の行為でもあるという限りにおいてもまた二重の意味を持つ[16]」ものである。この統一的状態は意識相互の「承認」であると名付けられ得る。即ち「意識」は「無媒介的に他者の意識であると共にそうではないことを自覚して (für es) いる[17]」のであり、双方の意識はそれぞれ他者を媒介にして自分自身との媒介的関係を得るのである。

かくして自己意識は、自己意識と他の自己意識とが相互に行為しあうことで繋がっていることを、すなわち「承認」しあっていることを認める。

この個所についてイッポリット (Hyppolite, Jean) は「他者」をストレートに「普遍的生命」と重ねて読もうとする。[18] 結果的には小論の帰結と一致するのはいうまでもないが、小論では論理的な繋がりを重視して、「他者」をとりあえず「自己」と「他者」との図式的な対立としておき、その事態こそがイッポリットの「他者性」であり、それゆえに「自己」と「他者」との間に「承認」が生じなければならないとした。

Ⅲ. 生死を賭けた戦い (Kampf auf Leben und Tod)

ところで以上の純粋概念に対して、叙述者の意識には新たな現われ、つまり、現実が立ち現われる。これはイッポリットも触れていたように[19]、「万人の万人に対する戦い」によって典型的に示される具体的現実を想定している。

まず自己意識の単純な自己自同性即ち「自立性」から自己意識は他者を単に否定するものでしかない。しかるに、この自己意識は既に「生命」あるものとして規定されているのであるからこの自己意識もまた他者も、現実的には「個体 (Individuum)」であると言える。[20] そして、他者もまた自己意識であり「自立性」を持ち、自分にとっての他者を否定する。本来統一されなければならない相互交流は、当面このように相互を否定し合う運動として示される。これは互いに「生死を賭けた戦い」となる。[21]

この戦いは互いに相手を、意識を持ち生命を有するものとしてではなく、

単に否定的な「物」として見ているに過ぎないことを意味する。このことは両者を自らの意識上の両極として捕えている自己意識自身にとって生命概念を放棄することを意味し、退歩してしまうことになる。

そこで目標としての「承認」を念頭に置きつつ両者が相互の立場を認め合う姿を考察しなければならない。

Ⅳ. 主人 (Herr) と下僕 (Knecht)

先の展開で生じた自己と他者が関わる仕方は、肯定的なものとして人格を認め合うものと、否定的なものとして物として関わるというものであった。先だつ展開を保存して重層的に考察するヘーゲルの仕方においてはこの二種類の関係をここで具体的に考察することになる。この具体的考察を、イッポリットとともに、「対自的 (pour soi) 」にあった概念が現実に実現すること、と言ってもよい。(22)

その関係は現実的にはまず次の様に「主人」と「下僕」の関係として現われる。

「主人」は自立的且つ自同的な意識であり、自分だけで存在する。(23) しかし、すでに他者との関係のうちに存在するのであるから、他方の意識を介して媒介的関係にあるところの自分だけで存在すると言わなければならない。そこでこの「主人」からみればまず他者はこちらから一方的に承認するもの即ち「下僕」となる。(24)

ところでこの「下僕」は既に意識を持つものである。そこで先の展開で得られた単なる否定としての意識と「物」の関係を「主人」と「下僕」のどちらが担うかが問題となる。現実的にはそれは「下僕」が担っている。そしてこのとき、先に獲得した自己意識と「物」との関係、即ち物に対するような意識的交流のない単純な否定的関係は、「主人」にとっては「下僕」を介して行なわれることになる。(25)

さて、このような「主人」と「下僕」の立場を考えると、「主人」の方が自己意識として本質的な在り方をしている。なぜなら「主人」は「下僕」に対して命ずることができ、自分では直接関わることのできない「物」に対しても、「物」に関り「物」に加工する「下僕」に自由に命じて自分の自立的意志を貫くことができるからである。つまり、「主人」は「下僕」からその自立的立場が「承認」されている。これに対して「下僕」は「主人」に一方的に命令されるのみでその自立的立場の承認は存在しない。また「物」に対

しても、加工できるとはいえ根本的にはその基本性質から逃れることができないそれ自体自立的な「物」にも支配されているのであるから、およそ意識としての自立からは縁遠いことになる。(26)

しかし、次に自己意識はこのような「主人」の意識とは異なることを自覚する。なぜなら「主人」の意識は「下僕」という他者に対して、その自立性を承認するどころか結局のところ否定してしまっているからである。従って、自己意識の真理としては当面その他者の自立性を最も承認している「下僕」へと移行しなければならない。(27)

しかし、当然のことながら「下僕」にとってすぐ問題になるのはその自立性すなわち自体的存在 (Fürsichsein) についてである。

「下僕」もまた自己意識である。従って、純粋の否定性と自体的存在を有する。「下僕」は他者としての「主人」が支配することに対して「畏怖 (Furcht)」を覚える。そこで「奉仕 (Dienen)」することで「主人」と承認し合う関係を得る。(28)

しかしこれは「下僕」にとってはまだ相手に主体があり、真の自体的存在（＝対自存在・Fürsichsein）になってはいない。ところで「下僕」は「労働 (Arbeit)」する。これは「物」を「形成 (Formieren)」することであるがこの行為によって「下僕」は主体性即ち自立性を得る。「労働」し、「形成」することで「下僕」は「物」に対して自分の意志を貫くことが出来、また、「主人」に対しても自ら得る成果を自分の意志を反映させて与えることができる。

このように「形成」することが「下僕」にとって、そして、当面の自己意識にとって即且つ対自的に、即ち真に自立的に存在することを意味することになる。(29)

しかし、最後に次の問題が残されることになる。即ち、この「形成」は個体としての意識を超えているという新しい事実である。もし、一個体が何かを「形成」しようとすればそこにはある普遍的なモデルが想定されなければならない。伝統的な言い方に従えばそれは「形相 (Form)」である。個体は自らの意志で何かを「形成」しようとするのがその際自らを超えたものによって支配されてしまうのである。この矛盾を抱いてこの節は終わる。(30)

2．展開を構成するコード

以上の「主人」と「下僕」を契機とする展開の全てが自己意識そのものの一部を為すものである。それをコードの諸関係に解きほぐすことでヘーゲルの真意を解読することが出来る。

まず、先に前の節に関してヘーゲルが叙述している概念を述べておいたが、この節に関しても重層的に関わってくるそれらの概念（コード）を考慮に入れつつ、この節特有の概念の構成を明らかにしなければならない。

Ⅰ.「自己意識の二重化」の構成

この個所は前節をそのまま受け継いでいるが、既に潜在的には「統一」へ「止揚」しようとする「力動」が働いていることは言うまでもない。

また、それは前節で特徴的に現われてきた「欲望」という分裂形態の廃棄に向かうことでもある。つまり、「主人」と「下僕」のこの節は「欲望」という一方的関係をいかに相互関係的な統一にもたらすかが主題（メインコード＝テーマ）であるといってよい。

Ⅱ.「承認の純粋概念」の構成

「力動」のコードはまた「経験」をも意味した。(31) 端的に言えばそれは叙述者の意識に次々に経験的に立ち現われる現象を意味する。勿論、この「経験」は筆者が以前論じたように(32) あくまで「学的経験」である。ところでこの立ち現われ方を観察して見ると２種類の仕方があることが分かる。

その第１は一般的な意味での「現実」である。これは後に「主人」と「下僕」の性格づけに関して明瞭に現われる。第２は抽象的な「理念」である。これは現実的状況を論理的に説明しようとする場合や、現実的分裂状況を統一へと導くべき目的として現われる。「承認」はまさにこの場合に当たる。

「承認」の具体的内容と展開については既に述べたが、ここに「承認」が現われたのは、「現実」的観察と「統一」へ導く為の目的論的意志との接点に構成されたものであると言わなければならない。しかし、それがヘーゲルの偶然的特殊的経験であると言うのは早計であろう。少なくともヘーゲルは前節で述べた「生命」コードとの論理的連関を維持することで真理性を確保しようとしているからである。

ともかく、相互に「承認」しあうことこそが「生命」を維持することであるというヘーゲルの主張は記憶しておくべきものである。

更に、この「承認」が「行為」という実践的コードを伴うことを付記して

おかねばならない。「行為」コードはまさにこの箇所に初めて現われるのであるが、それは以降、「自己意識」と、『精神現象学』の全体を貫く重要なコードになるのである。

Ⅲ.「生死を賭けた戦い」の構成

ヘーゲルの叙述は先に述べた「現実」と「理念」の交替劇にあるといっても過言ではない。それはヘーゲルに特有のものというより、カントの蒙ったいわゆる経験論的衝撃に始まるドイツ観念論的傾向にあるといって良い。立ち現われた経験的データを論理的に再構成しその意味を読み取り、更に新しく経験したデータによって再び論理的に構成するという学的方法論は各自の哲学的傾向を超越してむしろ当然の方法となっていたし、また、現在もその延長にあると言って良い。中世の真理が神であったのに比して、この時代の真理は既に経験と論理であった。しかし、勿論この経験が学的経験たらねばならないのは先に述べた通りである。

「生死を賭けた戦い」は、まさにこの「現実」に相当する。そして、ヘーゲルの「理念」的帰結は、既に述べた様に、個体が自立性すなわち自己自同性だけに固執するという状態は本来生命あるものとしての他者を「物」すなわち自立性と生命がないものとみなすことであるとされる。そして、ここからすぐに生じる理想的な「理念」が、「承認」であることはいうまでもない。

Ⅳ.「主人と下僕」の構成

この節はヘーゲルにとっての「現実」としての「主人」と「下僕」というコード（具体的な内容については既述の通り）以外は既に述べられたコードによる構成であるが、その構成の仕方に於いてヘーゲル特有の論理を明瞭に指摘することが出来る。

それは、先にも述べたように、叙述する意識に立ち現われる（経験）、契機的要素と要素の持つ関係を次々に踏襲し、むしろその関係を次の段階の要素として継承していくという、重層的な論理である。

「主人」と「下僕」そして「物」のそれぞれの要素に「自立性」や「自体的存在」が個々の存立を維持しながら、同時に他者の「生命」や「自立性」を「承認」することをいかなる仕方で確保しようとし、また妨げているのかについては、先に述べた通りであるが、その論理的展開が上に述べた重層的論理にのっとっていることは言うまでもない。

この重層的論理が現在考察している「自己意識」の性格とどのような関係

を持つかについては次節で改めて考察する。

3.「主人と下僕」節と自己意識

最後に、今回考察の対象とした「主人と下僕」を中軸としたこの個所から推論される「自己意識」の基本的性格を考察しなければならない。

まず背景的なコードのうち最も基本的なもののひとつとして、「力動」が挙げられた。それは具体的には「統一」と「分裂」との相互交替として示される。さらに「主人と下僕」節に於いてはそれら「統一」と「分裂」は次のコードで示されることになる。

「統一」＝「生命」「類」「承認」「形成」「行為」

「分裂」＝「欲望」「自己意識の二重化」「他者」「個体」「生死を賭けた戦い」「自体的存在（自立性）」「主人」「下僕」「物」「畏怖」「奉仕」

まず、これら全てが先に述べた通り内容的には「自己意識」そのものを構成する要素であることは言うまでもない。更に、構造的に上記「統一」と「分裂」が「自己意識」に於いては共に存在しているという点に注目しなければならない。(33) 更に詳しく観察すれば「自己意識」とは、一方で個体性に分裂していながら、他方に於いて全体性に溶け込んでいるという事実が指摘される。もちろん、『精神現象学』の「自己意識」章にさきだつ諸展開も基本的には個と全体との対立であったことはいうまでもない。しかし、いまや、その個は上のコードのすべてを担い、とりわけ生命を持つべき存在であり、人間として行為すべき人格となっている。

その様な個的存在が一体どのような点で個であり、どのような点で全体であるのか。それが上記「統一」と「分裂」に分けられたコードの自己意識の内容と構造における意味であり、その詳細は既に述べられた。

ところで自己意識が究極的にどの点で「個」であるのかについてはここではまだ触れる個所ではないが、「主人と下僕」の論理的展開に典型的にみられる重層性などから、ひとつの予測をたてることができる。

それは、この個所がフィヒテとのアナロジーでしばしば論じられるように、自己意識とは個体における自覚的意識に限定されるものではないか、という予測である。それは、単に肉体に限定されているとか特定の個人に限定されているといったものではない。個体に限定されている、というのはやはり概

念的な意味合いで、むしろ次の様に個体性を維持しつつ、全体そのものである、と理解しなければならない。

そもそも「自己意識」は「自らの真理と等しいという確信」から出発したのであった。それは少なくとも自分が得た、もしくは得るであろう知はすべて正しい、という自覚であり、更に言えば、そのことが可能なのは、自らが、全体としての真理そのものでもある、という事態をおいて他には有り得ないのである。譬え個体性に限定されようと意識のこの自覚について否定するわけにはいかない。叙述者ヘーゲルの「学的」および「理念的」経験に基づいて意識の地平に新たな経験が生じても過去の知を捨て去るのではなくむしろ重層的に積み重ねていくことの「自己意識」章における根拠がこの始めの確信にあることは言うまでもあるまい。しかし、重層的に積み重ねるというのは初めから全てが知の明るみにあっては起こり得ない事態である。叙述の展開が可能であるためには、未だ知られない事態が共存していなければならない。この、未知への自己限界意識、これこそ意識ある個体の特質である。勿論、先の確信から、いずれ全てを知ることへの可能性だけは存在する。その可能性に向けて「経験」し続けるという「個体性」、これが当面の予測的結論である。それが確定されるのは次節「不幸な意識」の考察と分析を待たねばならない。(未完)

註

(1) Hegel, G. W. F.: "Phänomenologie des Geistes", Felix Meiner, PhB 版, 1952
(2) ibid. S.133-140
(3) 拙論: "「自己意識」の分析—端緒的試論—", (中埜肇編: "ヘーゲル哲学研究", 理想社刊, 所収)
(4) 註(1) と同書, S.141-150
(5) 註(3) と同書, P.140
(6) 註(3) と同書
(7) 註(1) と同書, S.21
(8) 註(2) と同
(9) 多様に用いられる術語であるが、筆者は、所記と能記、記号と意味等々の区別を全て消失せしめた統一的用語として用いる。
(10) 註(3) と同書
(11) パラダイムについては註(3) の P.151 を参照。

(12) 註(3) と同書
(13) 註(1) と同書，S.141
(14) 叙述するものとしての反省的意識の構造については註(3) の拙論、P.138-139 を参照。
(15) 註(1) と同書，S.142
(16) ibid. S.142
(17) ibid. S.143
(18) Hyppolite, Jean: "Genese et Structure de L' Esprit de Hegel", Aubier, Éditions Montaigne, Paris, 1970, Première Partie, 161P. ff
(19) ibid. 164P.
(20) 註(1) と同書，S.143
(21) ibid. S.143
(22) 註(18) と同書，167P.
(23) 註(1) と同書，S.146
(24) ibid. S.146
(25) ibid. S.146
(26) ibid. S.147
(27) ibid. S.147-148
(28) ibid. S.148
(29) ibid. S.148-149
(30) ibid. S.149-150
(31) 註(3) と同書，P.155
(32) 拙論："ヘーゲル弁証法の基底—「現象学的反省」の意義—"，（梅光女学院大学論集20号，昭和62年 3 月刊），P.66-67
(33) 樫山欽四郎："ヘーゲル精神現象学の研究"，創文社刊，昭和36年，P.240 において、「生命」の様な統一的概念と、それに対立する分裂的概念に関して、マルクーゼが統一的概念の面を表に出し、分裂的否定的概念を弱くしている、と批判されているが、小論の立場もまたいずれかに強弱を与えるというのではなく、統一的及び分裂的な全ての概念を契機とするものこそが、ヘーゲル的自己意識であるとする。